

「師」の教えを通して人間を磨く

鎌ヶ谷市教育委員会 教育委員
松戸簡易裁判所調停委員
文部科学省学校評価委員

皆川 征夫

はじめに

教師は子供から「師」と仰がれるのは難しい。今、教育の中で単に知識を憶えさせるだけでなく、人間として道を求めることの貴さを教えること、出来る教師がどれほどいるだろうか。

青年時代、王陽明は妻一斎を、朱子は李延平を師と仰ぎ、師から学ぶことによって二人の人生は大きく開花した。師より人生の原理・原則を徹底的に伝授され、ついにはそれぞれ陽明学、朱子学を完成させ聖賢となった。

陽明学者でもある安岡正篤氏は、リーダーになる条件の一つとして優れた師を持つことを挙げ、金の草鞋を穿いても良き師を探せと教えている。私自身も、氏の教えに強く共鳴し、『我以外皆師』の志を立て、師との出会いを大切に生きてきたつもりである。

二人の師

さて、私自身にも、多くの人との出会いの中で師と仰ぐ人との出会いがあり、その教えを受けなければ今の自分は恐ろしくなかったであろうと思っ

てゐる。私には少年時代から青年時代に強烈な影響を受け、そして私を教師の道へと導いた二人の師がいる。

まず、その一人は私にとって、もう一人の父とも、兄ともいふべき人であった。残念ながら2年前に生まれ故郷の銚子で他界した。目を閉じて動かない師を前にした時、溢れる涙を堪えることが出来なかった。師との交流は、中学に入學し、師が顧問を務める剣道部に入部したことに始まる。以来、死に至るまでの約50年の長きにわたり師として慕い、また、私を導いてくれたのであるが、不思議なことに叱られたり、説教されたりした記憶がない。特に思い出すのは、数学・英語の個人指導をしてくれたことや、戦争の体験を語ってくれたことである。テアトル東京という映画館で当

時話題であったベン・ハーを見せてくれたり、尾瀬沼等へ登山に連れて行ってくれたりもした。また、師の親類には医者が多く、怪我をすれば師の兄の開業する医院で看てもらった。師は中学・高校の社会科教師であったが、時々勤務時間終了後に母校の中央大学に行き、司法試験合格を目指し、猛烈に勉強に取り組んでいた。時々、私も連れられて大学に行ったが、大勢の人が必死に勉学に励んでいる様子が目に焼き付いた。時折、御茶ノ水の本屋街にも寄ってくれたので、古本をあさって楽しむことも憶えた。師とのこうした日常の中で、いつの頃からか師を一人の理想的な教師像として描き、そして師のような教師になりたいと思うようになった。私の中高時代の夏休みの多くの時間を師の住む銚子の君ヶ浜で過ごし、大学時代の苦悩の時期にもこの海を眺めて立直ったことも、私の大切な人生の一ページとして刻まれている。師は、このような普段出来ない様々な体験をさせてくれた。

さて、もう一人、私に決定的な影響をもたらした師は、大学時代のゼミの宮澤教授である。このゼミは、最初『企業会計原則』の本の読解から始まった。一通り読んでよく理解出来たと思つた矢先、師から質問が飛んだ。「企業とは何かね、説明してみなさい」と。この質問は「学校とは何かね」と同じようなものであり、わかりきつたあたりにも自明のもので問題にすらしたことがなかったが、説明するとなると大変困難である。わたしの戸惑う様子を見て師は「それはエクイティ・ロー（株主等が持つ抽象的請求権）とゴイング・コンサーン（企業の継続性の原則）だよ」とおっしゃった。おおよそのイメージとして持っているものの本質を改めて追究し、具現化するというこのやりとりが、師に対する私の興味を増幅させた。そして偶然にも、その日の帰りの電車で師と乗り合せたので、勇気を出して話し掛けてみた。幸いにもそれが師から個人的な指導を仰ぐ契機となった。師は昭和元年、新潟の聖籠町網代浜の漁村で生まれ、身長180センチメートルにもなる大男であり、高校時代には大身を活かして柔道に励み、庭の大木に紐を巻き付け、大木を人に見立てて毎日練習し、大木に大きな紐の凹みを作つてしまつた程の剛の者であった。私が師の網代浜の実家に一週間ばかり世話になつたその折に、師の母親が「今、あなたが座つて居る場所の土台は既に3回取り替えました。それは清（師の名前）が若い頃に結核を患いながらも尚勉学に励み、たく

さんの汗をかき、それが畳を腐らせ、更にはその下の土台をも3度も腐らせたのです。肺に10円玉程の穴が空いて入院した際には、顔を横に向けただけで大量に咯血し、洗面器が必要なほどでした。清はそれでもめげずに、妹に頼んで本の内容を古新聞等に書き写してもらい、それを天井に貼って勉強してました」と教えてくれた。当時は戦争の真只中にあり、栄養不足等で結核患者が大変多く、病院ではタンパク質源としてねずみさえ食事に使われていたそうだが、それを食べられない人は確実に死に、食べられた人は結核を克服出来たと師から聞いた憶えがあった。そんな状況があり、師が大学院を卒業して大学教師になったのは40歳を過ぎてからであった。

私は師と出会ってから週2〜3回のペースで自宅にお邪魔し、寝食を共にして勉学の指導を受けた。師は予めアメリカの大学の大学院等で使用している教材を直接入手し、それを2人で読み進めていった。例えば、法の常識や法とは何かについて書かれた『コモンセンス入門』や、過去の形而上学を懐疑し、批判主義的認識論を確立したカントの『純粹理性批判』等、英語やドイツ語で書かれた原文をタイプライターで打ち込み、それを2人で翻訳していくことが中心であった。この勉強は大変厳しく辛かった。予習しても到底理解出来ず、自分の無能ぶりがたちまちに暴露されてしまった。「翻訳は、文法なんか考えたら出来ないよ。論理を考えなさい」とよく指摘された。また「法学を志すのならまずソクラテスからサルトルに至るまで西洋哲学史を徹底的に憶えなさい。自分が志す学問の大家を選び、その人のすべての本を年代順に徹底的に読破すること」等々の指導を受けたことが強く印象に残っている。学問の匂

いを感じたのもこの頃である。私が挫折感を味わって落ち込んでいた時に、師は「君の朋友は座って勉強し続けていたので、畳がすり切れてしまったそうだよ。また私の友人は、机に向かって勉強ばかりしているので最後には足が腐ってしまったそうだよ」と励ましてくれた。

こうして師との勉学を続ける中で、よき翻訳は著者以上の力がないと出来ないこと、三度の飯より学問が好きになること、そして、自身にどのような困難な出来事があっても学問には神聖な気持ちで臨むこと等々、まさに貴重な勉強をさせていただいた。この師との勉学の期間は、私の人生の中で最も勉学に励んだ時期で充実したものであった。しかし、反面私にとって苦痛に耐えた時期でもあった。学問を手段とし、学問それ自体を目的と出来なかった私は、自分の能力の限界を悟り、大学卒業後3年を経過して中学教師になった。しかし、ここで学んだことは教師になってから多大な力として働いた。

■師としての朋友や同僚

人間の道を教えてくれる人を師と呼ぶならば、志を同じくする朋友や同僚もまた大切な師である。教師にはその勤務の特殊性から様々な研究・研修組織が準備されている。幸いなことに私も初任の頃から市が作成する教師のための社会科学学習指導資料の編集・作成に携わってきた。これは地域の教材開発や授業案作りが中心で、市内から選ばれた熱心な5〜6名の教師により喧々諤々の議論を経て作成される。ここでは、教授論、教員論、果ては人生論等まで幅広い議論が展開され、自らを鍛える絶好の場でもあり、この仕事を通じて多くの教師が成長していった。幸運にも、私が参加

出来た研究機関は他にも多数あった。私が勤務した学校のほとんどが国や県、あるいは市の研究校であり、その研究のために著名な研究者、教科調査官、指導主事等の諸先生方から継続的に指導を受ける機会に恵まれ、研究への刺激を受けた。また、朋友らと自主的な研究組織を設立し、その中で研究や交友を深めたのも意義があった。筑波大学谷川教授を中心にした全国的な社会科学研究組織、椎名仁先生を会長とした九十九里教育工学研究会、地元の船橋市社会科学教育研究会及び月に一度実施し数十年続いている教材開発セミナー等々、代表的なものでも数多い。研究会で出会った人との交流が今でも続いており、それは私の貴重な財産の一つである。

■まとめ

研究や研修会で大切なことは議論が出来ることである。当然のことであるが議論すること、これは、他の意見を聴取出来、尊重出来ることである。また、無我、無私になり真実を極めたいという精神が必要であり、そして皆の意思が決したら素直にそれに従い実現を目指そうとする態度である。

しかし、最近の教育界では、自由に議論が出来ないと嘆く声をよく耳にする。教育の中から自由闊達な議論が失われたら、教育の火も消え失せてしまう。教育界を上げて早急に改善すべき課題である。

人は人間的によりよい人生を求めて生きようとする。そのことがある限り人は生涯学び続けるに違いない。そこに「師」の存在は、天に輝く星の様に光り輝くであろう。